

# 表紙の時計／クロノメトリー・フェルディナント・ベルトウー・クロノメーターFB 2RE

本草や地質、はたまた蘭学の学者であり、浄瑠璃作者であり、発明家でもあった江戸時代中頃のスーパーマン、平賀源内（1728年～1780年）は、オランダ製のエレキテル（静電気発生装置）の修理を手がける一方で、夏場に売り上げの芳しくなかった鰻の蒲焼きを、土用に食べると精がつく……とPRしたことで、よく知られている。おそらく多くの事に興味を見出す一方で、極めて追求心の高い御仁であったように思えてならないが、ほぼ同じ頃にパリで時計工房を開いたのが、アブラアン・ルイ・ブレゲ（1747年～1823年）である。

スイス・ヌーシャテル生まれの時計職人であったブレゲが、シテ島の自社工房を拠点にして行った、時計に関する数多くの発明や改良は現代の時計業界にも影響を与えているのだから、まさに「恐れ入りの鬼子母神」である。末裔のブレゲ7世が記した伝記に目を通すと、ブレゲもまた物事全般に亘って積極的であり、専門の時計技術に関しては追求心のかたまりのような存在であったように思える。しかし、話はここで終わらない。その若き時代のブレゲに時計技術を伝えたのがクロノメトリー・フェルディナント・



ケース：直径44mm、18Kローズゴールドもしくはホワイトゴールド、30m防水、シースルー・バック+側面に絛窓●ムーブメント：片持ちの吊り下げ式フュゼ・チェーン、およびルモントワール機構を装備したCal.FB-RE.FC (58石、1万8000振動、パワー・リザーブ約50時間、COSCクロノメーター仕様)●価格：ともに2941万4000円

ベルトウーの創設者であるベルトウー（1727年～1807年）なのだから面白い。同じくヌーシャテルに生まれた後、パリに移ったベルトウーは、デテント脱進機の生みの親であるピエール（ジュリアン）・ル・ロワの元で本格的な時計技術を身につけ、若干26歳で時計師親方とな

った……と聞かされたのは2018年。わが国で開かれたクロノメトリー・フェルディナント・ベルトウーの発表会席上だった。18世紀の華やかなパリの街中がどんな装いであったのかは知らないが、思わずその時には肩を並べて歩くふたりの姿が

脳裏に浮かんでしまった。でも、そんなことが考えられる時計と時計環境は、この上もなく興味深いものだと思う。

さて、そのクロノメトリー・フェルディナント・ベルトウーは、ショパールのカール・フリードリッヒ・シヨイフレC E Oの意気込みによって、2015年に再生された古えの時計メーカーだ。最大の特徴は、懐中時計時代のメカニズムを取めた質の高い腕時計を少量生産すること、2020年の新作が「クロノメーターFB 2RE」である。

コレクションの2作目となる本機は、1760年代に製作された同社のマリノクロック、No.HM6にインスピレーションを得たグランド・コンプリケーション・モデルである。厚さを抑えたグランフー・エナメルダイヤルや、ビス留めのラグに加えて、ケース側面には機構を眺めるための絛窓を装備するが、そのいっぽう、前作と同じくフュゼ・チェーン機構を備えた新作の手巻き式ムーブメントは、新たにルモントワール・デガリテ機構を備えており、両方のメカニズムによってトルクの一定化が図られるのが最大の特徴だ。なお、日差は0.5秒以内と発表されており、合計で20個が生産される。